

受賞おめでとうございます

新井宿自治会連合会 感謝状贈呈 (敬称略)

◇退任会長 ◇退任副会長
吉川 信一 濱田 弘子 寺内 義子

◇永年表彰
吉澤 洋子 平林 千賀子 藤野 兼三 井上 佳江子
岩井 勝子 湯浅 達男 伊藤 泰子 岡田 久美枝
小須田 修 小松 梨子 加藤 みゆき 橋本 悦子
佐古田 庸一 三本 和弘 荒井 昭夫 高柳 美春

大田区交通安全功労者表彰
和田 芳明

新井宿地区 8 月の行事予定

開催日	イベント	会場	主催
8月22日	盆踊り	新井宿七丁目児童公園	新井宿七丁目町会
8月22日	納涼祭	春日神社	中央一丁目町会
8月23日	西瓜割り大会	大森三中	中央四丁目町会
8月23日	防災こどもまつり	山王公園	山王三・四丁目自治会
8月29日	盆踊り大会	さくら通り三丁目公園	新井宿六丁目町会
8月30日	ウォーターランド	さくら通り三丁目公園	新井宿六丁目町会

発行	地域力推進新井宿地区委員会
編集	「わがまち新井宿」編集委員会
中央一丁目町会	編集委員長 関口 直人
山王三丁目町会	副編集委員長 吉川 信一
新井宿五丁目町会	副編集委員長 谷口 敏子
山王三丁目東自治会	編集委員 荒木 秀樹
山王三・四丁目自治会	編集委員 三沢 清太郎
山王三・四丁目自治会	編集委員 岡本 浩子
山王三・四丁目自治会	編集委員 高橋 弘樹
山王三丁目町会	編集委員 小関 智子
中央一丁目町会	編集委員 形見 俊郎
中央四丁目町会	編集委員 佐々木 泰子
中央四丁目町会	編集委員 矢澤 直樹
新井宿五丁目町会	編集委員 加藤 弘子
新井宿六丁目町会	編集委員 鈴木 由紀子
新井宿六丁目町会	編集委員 斉木 貞子
新井宿七丁目町会	編集委員 本田 君子
……共同編集……	
監修 新井宿自治会連合会	
事務局 大田区新井宿特別出張所	
大田区中央1-21-6 ☎3776-5391	
http://www.city.ota.tokyo.jp/omori/index.html	

新井宿特別出張所管内の世帯と人口 令和8年6月1日現在

●世帯数…12,140世帯	前年同月比 +20世帯
●総人口…22,051人	前年同月比 +38人(男+16人 女+22人)
(男…10,985人 女…11,066人)	

新任所長あいさつ



新井宿地域の皆さまこんにちは！
本年4月から、新井宿特別出張所長に着任いたしました佐藤と申します。
皆さまと一緒に、この新井宿を盛り上げ、より良い地域にしていけるよう全力で取り組んでいきたいと考えています。

自治会連合会や各自治会・町会活動、青少年などの活動で、皆さまと一緒にする機会があるかと思いますが、何かございましたら、お気軽にお声かけください。
これから、よろしくお願いいたします。

新井宿特別出張所 佐藤 潤一

新井宿スポーツニュース

ドッジボールチーム IRINI の快挙！

入二小を拠点に近隣の小学生で構成されたドッジボールチーム IRINI が、昨年千葉で開催されたアジアドッジボールチャンピオンシップの13才以下の部で何と優勝していた。日本、韓国、台湾、香港、インドが参加した大会だ。今年も活躍を期待し、是非応援したい。



新井宿五丁目町会青年部杯モルック大会

さわやかな5月5日(火)の子どもの日に入新井第二小学校の校庭で30名の参加者を迎え、8チームによるトーナメント方式で催された。結果は、小学3年生と高校1年生コンビが優勝、60歳超えのおじさんトリオが準優勝に輝いた。老若男女が気軽に楽しめるスポーツです。地域の皆さまのご参加お待ちしております。

編集後記

「新井宿義民六人衆」は明治時代に至るまで罪人として扱われ、供養できませんでした。239年後の大正5年から法要ができるようになり、今年111年になります。「直訴」に関する伝承は全国にありますが、物証のあるものは「六人衆」だけとのこと、新井宿の大切な歴史として守っていきましょう。

大ターミナル駅となった渋谷駅と新宿駅の開業は1885年3月1日ですから、大森駅が8年余り早いことになり、ちょっと誇らしい感じがします。

前号一面に掲載した「へんてこ生物山」の作者、湯本心葉さんは入四小ではなく、山王小の誤りでした。お詫びして訂正します。

(加藤編集委員)



「川の海」
入二小 六年
河野彩和さんの作品
(切り絵)

新井宿義民六人衆報恩感謝祭、三百五十周年を迎える！



善慶寺に到着した義民六人衆とお稚児さんたちに囲まれた院住様

『語り継ごう、この地に命をかけた六人の勇気を！』

江戸時代は延宝五年(1677年)のことです。武蔵国荏原郡新井宿村は干ばつ、冷害、更に六郷川の洪水による凶作で、餓死者が出る年が続きました。年貢軽減の訴状を領主へ届けても受け入れられず村民の代表六名、『間宮新五郎』『間宮太郎兵衛』『酒井権左衛門』『酒井善四郎』『鈴木大炊之助』『平林重郎左衛門』が秘かに熊野神社に集まり、十九か条の訴状を作成、幕府へ死を覚悟の直訴を決意するのです。もう一步のところで悲しいかな密告により捕らえられ、六人は亡骸となって帰村するのです。悲しく辛い話ですが、他にどうすることも出来なかった時代を生きた義民六人衆の勇気を忘れず讃えたいと思います。熊野神社に隣接する善慶寺には、彼らを弔うための特別なお墓と墓碑があり、明治以降に明らかとなる物語も善慶寺で詳しく知ることができます。是非、この三百五十周年を機にお参りされては如何でしょうか。



義民六人衆の面々

大森駅開業150周年を祝う！

『〆梅に名をえし大森を～すぐれば早も～』と、鉄道唱歌に歌われた「大森駅」！

明治時代の初め、新井宿村にあった線路の保守点検のための詰所が「大森駅」になったのは、1876年6月12日でした。日本で初めての鉄道開業からわずか4年、廃刀令公布から2ヶ月半ほど経った頃です。今年は様々な形で150周年が祝われています。これを機にこの地の歴史と文化を振り返り、未来につなげていきましょう。

「大森駅開業150周年記念ロゴ」を用いたヘッドマークをつけた京浜東北・根岸線の電車が8月末頃まで一編成だけ運行するそうです。さあ運が良ければ見られますよ。



●地域ゆかりの文化人(6)

『挿絵画家・三井永一と宇野千代の邂逅』

今回は挿絵画家として活躍された三井永一さんをご紹介します。かつて臼田坂下に三井さんと一緒に暮らしてらした、従弟の菊地伸介さんにご協力頂きました。

今秋から放映される NHK 朝ドラ『ブラッサム』は、宇野千代の半生をモデルにした作品です。その宇野千代の代表的な自伝的小説『生きて行く私』（昭和 57 年、毎日新聞「日曜くらぶ」連載）の題字と挿絵を担当したのが、画家・三井永一でした。



『生きて行く私』第1回「毎日新聞 日曜くらぶ」
昭和57年2月7日掲載



昭和59年10月、銀座ギャラリー・オリブにて

■山形から上京、臼田坂下で絵の道へ踏み出す

三井永一は山形県鶴岡市の生まれ。中学時代、美術教師の地主梯助（のちに日本芸術大賞受賞）から「東京美術学校（現・東京藝大）を受けてみてはどうか」と勧められます。父を早くに亡くし、母と二人暮らしだった三井は、16歳で叔父を頼って上京。寄宿したのは大森区新井宿四丁目、臼田坂下の四つ角にあった叔父の家でした。

小石川の川端画学校に入ったものの、予備校特有の競争に馴染めず不安を抱えていた頃、内幸町の春陽会洋画研究所と出会います。自由で闊達な雰囲気魅了され、ここで学ぶことを決意。木村荘八、中川一政、石井鶴三ら、当時の第一線の画家たちが指導に訪れ、三井はその中で腕を磨きました。

18歳で春陽会展に初入選、翌年には文展にも入選。上野のエリートコースではなく、在野の春陽会で学んだことが、のちの多彩な作風につながっていきます。

■戦争による中断、そして挿絵画家としての活躍

画家としての道は戦争で一度中断されましたが、復員後、三井は木村や岡鹿之助の指導のもとで再び絵筆をとり、精力的に作品を発表します。転機となったのは、木村や岡の紹介で舞い込んだ挿絵やカットの仕事でした。

昭和 40 年代に入ると、新聞連載や週刊誌・月刊誌の挿絵が本格化。柴田錬三郎、早乙女貢、池波正太郎、横溝正史、小松左京など、名だたる作家の作品を手がけるようになります。木村荘八ゆずりの日本画風の柔らかな線から、前衛的なタッチまで自在に描き分ける三井の技量は、春陽会での幅広い経験が支えていました。

■宇野千代との仕事

三井が宇野千代作品の挿絵を担当したのは、昭和 48 年の『風の音』、昭和 50 年の『薄墨の桜』『八重山の雪』、そして昭和 57 年以降の『生きて行く私』シリーズは昭和 61 年まで 279 回も続きます。晩年の宇野千代と長く仕事を共にしました。

『風の音』は馬を愛する主人公が登場する小説でありながら、実は宇野千代自身は馬についてほとんど知識がなかったのです。三百部限定版「風の音」のあとがきに宇野千代が三井永一との愉しき邂逅を綴った一文があります。

今度、青娥書房からこの小説の限定版が出る話が決ったとき、私の一番うれしかったのは、挿絵を三井永一さんに描いて貰へることが、書房社長の熱心な説得によって、やっとのことで決ったときでした。このことは、この限定版を出すについての、私の念願でした。さうです。繪が出来上って来たのは、このことを頼んでから四ヶ月経った、三月二日の朝でした。うす紙におはれたその繪を始めて見たとき、私は、自分がどうして三井さんを固執したかが分ったやうな気がしました。彩色を施された二十枚と言ふ夥しい数の画。そのどの一枚にも、私の脳裡にある明治三十年の夢が、まざまざと描かれてゐるのです。勿論のことですが、この本は三井さんの繪と私の文章が一つになって出来上った作品なのだと思います。をかしなことを言ふやうですが、むかしの画人文人が一緒になって、一巻の繪巻を描き上げたときの喜びは、かうもあらうかと言ふ思ひをしたことです。そして私は、これまでに出版された数多くの限定版の中で、この本ほど美しい出来栄へのものはあるまいと、ひそかに思ったことでした。

「私は馬を描くのが苦手なんです。困ったなア、」まだ會ったことのなかった三井さんから、電話で最初に聞いたのが、この話でした。どうして、馬が苦手な人間が二人集って本を作るのかと、私はをかしかったものでしたが、しかし、出来上った繪を見ますと、三井さんの馬がどうして苦手なのか、私には分りませんでした。どうか、私の書いた馬も同じやうでありますやうにと念じながら、この暗合は、何かとても嬉しいことのやうに私には思へました。

（宇野千代『風の音』昭和 48 年青娥書房刊、あとがきより抜粋）



三井永一 ● 洋画家・版画家・挿絵画家・ガラス絵作家

1920 年山形県鶴岡市生まれ。1936 年上京、新井宿臼田坂下の叔父の家に 1955 年まで寄宿し画家を志す。1943～45 年、満州、済州島で兵役。1953 年より春陽会会員。1971 年度第 2 回講談社出版文化賞（さしえ賞）を受賞。2013 年逝去。享年 93 歳。

